令和６年度　日野市立日野第七小学校経営重点計画　　自己評価シート　　令和7年3月公表

★学校教育目標　◎自ら考え学び続ける子　○思いやりをもち行動する子　○心と体の健康をつくる子　○協働してやりぬく子

★目指す学校像（ビジョン）

【目指す児童・生徒像】
○自ら課題を見つけ、考え、自分の力で学び続ける児童　○友達や周りの人への思いやりの心をもち、行動する児童
○運動に親しみ、心身ともに健康・安全に気を付けて生活する児童　○何事にも挑戦し、みんなで協働して最後までやりぬく児童

【目指す学校像】
一人一人を大切に、みんなの笑顔がはじける学校
○子供たちが毎日笑顔で過ごせる学校　○保護者が安心して子供を通わせられる学校　○地域が協働的につながれる学校　○教職員がやりがいをもち自己実現できる学校

【目指す教師像】
○すべての児童を大切にし主体的な学びを育む教師　○保護者・地域とつながり創造的に教育活動を行う教師　○常に授業改善に努め協働して高め合う教師

★重点計画の概要

昨年度、開校50周年を迎える中で、児童には「次の50年、100周年に向けて新しい七小をみんなで創っていこう」と呼びかけ、保護者・地域の協力を得ながら様々な取組を行ってきた。今年度はコミュニティ・スクールとしてスタートし、児童・保護者・地域・教職員みんなが新しい学校を創っていく当事者としての意識を高めながら教育活動を行っていく。そのために必要となるのが、重点目標に掲げた「自ら考え学び続ける子」の姿であり、「探究的で深い学び」を身に付けていくことである。そこで第4次日野市学校教育基本構想では「学びの変革」プロジェクトに取組み、探究する児童を育てていく。

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準 評価点	取組指標	評価点	成果指標	学校評議員・学校運営協議会の意見	結果の分析と改善策
みんなが当事者として、自ら歩む道をつくる	【学びの羅針盤・創造】 児童が自己有用感をもち、自分たちの学校としての当事者意識を高め、これからの七小を創っていく主体者となる。	様々な人との関わりによって豊かな人間性を育み、思いやりのある行動で一人一人が大切にされ、自己有用感を得られるようにするとともに、自分の学校としての当事者意識を高める。	○集会・学習・オリエンテーリング等、たてわり活動を充実させることで児童のリーダーシップ・フォロワーシップを育てるとともに、思いやりの心を育む。 ○発達段階に応じて児童一人一人が、学級・学年・学校の課題に目を向けられるようにし、課題解決に向けて主体的に取り組めるようにする。 ○行事においては児童の意見を聞きながら一緒に作り上げることで自己有用感を育むとともに、自分の学校としての当事者意識を高める。	３	４　児童の自己有用感と当事者意識を向上させることができた教員が１００％ ３　児童の自己有用感と当事者意識を向上させることができた教員が９０％以上 ２　児童の自己有用感と当事者意識を向上させることができた教員が８０％以上 １　児童の自己有用感と当事者意識を向上させることができた教員が８０％未満	２	４　「学級活動や委員会活動などで、すすんで意見を言うことができた。」児童が９０％以上 ３　「学級活動や委員会活動などで、すすんで意見を言うことができた。」児童が８０％以上 ２　「学級活動や委員会活動などで、すすんで意見を言うことができた。」児童が７０％以上 １　「学級活動や委員会活動などで、すすんで意見を言うことができた。」児童が７０％未満	・上級生が自覚をもち、下級生に優しく接しているのが七小の特徴。 ・６年生が良い指示を出して優しく接しているので、下級生にああなりたいという憧れの気持ちが育っている。 ・いろいろな発想を持っている児童に対する教員の気付きが大切。それをしっかり見取っていくとさらに児童のよさが引き出されていく。 ・たてわりを中心にリーダーの経験を積み重ねることが、一人一人の自己有用感の高まりにつながっている。	児童の回答が79%と１%足りず、評価点は２となってしまったが、約80%以上の児童が肯定的に回答した。別の児童アンケートにおいても自己有用感の高まりが見られた。教師の指導とともに児童の実感も高まってきている。今後も、あらゆる場面で、児童に選択権や決定権を委ね、児童の自己有用感や当事者意識の向上を図っていく。
	【教職員の挑戦】 教職員が明るく健康に働き自己実現を図ることで、教育活動の質的向上を図る。	教職員の年間超過勤務時間を減らすとともに、年休取得率を上げることで、ライフ・ワーク・バランスを推進する。	○毎週１回学年会を行い、学習指導・保護者対応等を副担任を含めたチーム学年として行う。 ○中学年以上で教科担任制を行い、授業準備の軽減を図る。 ○ライフ充実デー（年休取得）、プレミアムデー（午前授業・会議なし）を設定し、教員の充実した時間を確保する。 ○毎月の超過勤務時間を確認し、月上限時間を超えている教員とは面談をとおして職務の把握と整理をする。 ○スクールサポートスタッフの積極的活用を進め、事務作業の軽減を図る。	２	４　働き方を改革を実践し、自己実現と教育活動の質的向上を図ることができた教員が１００％ ３　働き方を改革を実践し、自己実現と教育活動の質的向上を図ることができた教員が９０％以上 ２　働き方を改革を実践し、自己実現と教育活動の質的向上を図ることができた教員が８０％以上 １　働き方を改革を実践し、自己実現と教育活動の質的向上を図ることができた教員が８０％未満	４	４　「先生は、笑顔で生き生きとしている。」と回答した児童が９０％以上 ３　「先生は、笑顔で生き生きとしている。」と回答した児童が８０％以上 ２　「先生は、笑顔で生き生きとしている。」と回答した児童が７０％以上 １　「先生は、笑顔で生き生きとしている。」と回答した児童が７０％未満	・働き方改革を進めることが児童のためにもなる。 ・いつも笑顔で児童に接していけるように、働き方を考えていく必要がある。 ・人が足りないことが最大の課題。 ・休日に来ている先生方に会うので心配。 ・地域でできることは支えていくので、学校側では、先生方が働きやすい仕組みをすすめてほしい。	ライフ充実デーの取得に関する質問が52%と低く、評価点が２となった。チーム学年としての協働した働き方や超過勤務しない意識、作業事務の軽減を図る意識はとても高かった。ライフ充実デーを取得する不安について、自己の児童や学年のことが心配と理由を挙げる教員も複数いた。取得するために見通しを学期始めに学年で検討する機会をもち、計画を立てたり、挑戦する意識を高められたりする。
みんなの多様な学びと多	【探究的で深い学び】 子供たちが自立した学習者として自ら課題を見つけ、考え、自分に合った多様な学び方で探究的に深く学べるようにする。	子供たちが多様な学び方を身に付け、一人一人が自分に合った学びと学び方を選択し、探究的に深く学べるようにする。	○「探究する児童を育てる授業デザイン」をテーマに校内研究をすすめ、探究プロセスを用いた研究授業を３回行い、２月には研究発表会をして効果を検証していく。 ○教員一人一人が自立した学習者としての児童の姿・ゴールイメージを明確にし、学び方を学ぶ段階、学び方を生かす段階を意識して自由進度学習などの授業改善に努める。 ○年２回の授業観察では単元計画や学習計画表を全教員で共有し、相互に授業観察ができるようにする。 ○子供たちの声を聞き、多様な学びスペースをつくる。	２	４　探究プロセスや「個別最適な学びと協働的な学び」を意識した授業を行った教員が100% ３　探究プロセスや「個別最適な学びと協働的な学び」を意識した授業を行った教員が９０％以上 ２　探究プロセスや「個別最適な学びと協働的な学び」を意識した授業を行った教員が８０％以上 １　探究プロセスや「個別最適な学びと協働的な学び」を意識した授業を行った教員が８０％未満	３	４　「授業では、自分で課題を選んだり、自分にあった学び方で学習している。」児童が９０％以上 ３　「授業では、自分で課題を選んだり、自分にあった学び方で学習している。」児童が８０％以上 ２　「授業では、自分で課題を選んだり、自分にあった学び方で学習している。」児童が７０％以上 １　「授業では、自分で課題を選んだり、自分にあった学び方で学習している。」児童が７０％未満	・多様な学びを行うには、教員一人でできるものではない。学校では、教員一人でもできるやり方をOJTなどで研修していると聞くが、たくさんの人が教室にいればそれも可能ではないかと考える。 ・CS委員会としてサポートできる人を探したり、声掛けをしていくことが大切。 ・児童は見られるといういつもと違った環境であるだけで学ぶ姿勢は変わっていく。	①自由進度学習を取り入れた授業の実践と②多様な学びのスペースづくりに関する質問ついて、できていないと答える教員が多くいた。①については、児童の実態や自身の指導力を理由に厳しく評価しているようであった。②については、教室内ではできているが教室外のことはできていないと質問の受け止め方で肯定的か否定的か回答が分かれてしまった。教室外におけるスペースづくりは担当分掌をつくり、児童の声を聞きながらつくっていけるようにする。

令和６年度　日野市立日野第七小学校経営重点計画　　自己評価シート　　令和7年3月公表

★学校教育目標　◎自ら考え学び続ける子　○思いやりをもち行動する子　○心と体の健康をつくる子　○協働してやりぬく子

★目指す学校像（ビジョン）

【目指す児童・生徒像】
○自ら課題を見つけ、考え、自分の力で学び続ける児童　○友達や周りの人への思いやりの心をもち、行動する児童
○運動に親しみ、心身ともに健康・安全に気を付けて生活する児童　○何事にも挑戦し、みんなで協働して最後までやりぬく児童

【目指す学校像】
一人一人を大切に、みんなの笑顔がはじける学校
○子供たちが毎日笑顔で過ごせる学校　○保護者が安心して子供を通わせられる学校　○地域が協働的につながれる学校　○教職員がやりがいをもち自己実現できる学校

【目指す教師像】
○すべての児童を大切にし主体的な学びを育む教師　○保護者・地域とつながり創造的に教育活動を行う教師　○常に授業改善に努め協働して高め合う教師

★重点計画の概要

昨年度、開校50周年を迎える中で、児童には「次の50年、100周年に向けて新しい七小をみんなで創っていこう」と呼びかけ、保護者・地域の協力を得ながら様々な取組を行ってきた。今年度はコミュニティ・スクールとしてスタートし、児童・保護者・地域・教職員みんなが新しい学校を創っていく当事者としての意識を高めながら教育活動を行っていく。そのために必要となるのが、重点目標に掲げた「自ら考え学び続ける子」の姿であり、「探究的で深い学び」を身に付けていくことである。そこで第4次日野市学校教育基本構想では「学びの変革」プロジェクトに取組み、探究する児童を育てていく。

領域	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策	評価指標・評価基準 評価点	取組指標	評価点	成果指標	学校評議員・学校運営協議会の意見	結果の分析と改善策
様なしあわせをつくる	【居場所・活躍】 誰も置き去りにしない精神のもと、子供たちにとって第一の居場所としての学校づくりをする。	いじめや不登校の未然防止・早期発見に努め、組織的な対応で早期の解消・解決に向けた取組をし、児童が安心して学校に来られる人間関係・教育環境づくりをする。	○学年担任制・教科担任制を導入することで、複数の教員による多面的・多角的な児童理解を行う。 ○校内支援委員会を毎週開催し、一人一人の状況を学校全体で把握することで早期に組織的な対応を行えるようにする。 ○「ひのスタンダード」やユニバーサルデザインの視点に立った授業の展開や環境整備をする。 ○年３回のふれあい月間において全児童にアンケート調査を実施し、いじめの早期発見に努めると共に、いじめ防止の教職員研修を実施する。	３	４　いじめや不登校の未然防止、早期発見、組織的対応に努めた教員が１００％ ３　いじめや不登校の未然防止、早期発見、組織的対応に努めた教員が９０％以上 ２　いじめや不登校の未然防止、早期発見、組織的対応に努めた教員が８０％以上 １　いじめや不登校の未然防止、早期発見、組織的対応に努めた教員が８０％未満	３	４　「学校には、困ったときに相談できる先生がいる。」児童が９０％以上 ３　「学校には、困ったときに相談できる先生がいる。」児童が８０％以上 ２　「学校には、困ったときに相談できる先生がいる。」児童が７０％以上 １　「学校には、困ったときに相談できる先生がいる。」児童が７０％未満	・誰も置き去りにしないためには、確かな学力を児童に身に付けさせることが必要である。	教員は95%以上、児童も88.5%と両者とも肯定的な回答が高い。教員の児童に寄り添う気持ちが、児童に伝わっていると考える。ふれあいアンケートには、児童同士の言葉遣いやちょっとした意地悪から大きなトラブルや気持ちのすれ違いを訴える児童がいるので、言葉遣いや友達との接し方について、継続した指導を行っていく。
社会と未来に開き、みんなでつくる	【対話・協働】 子供たちが地域から学び、地域とともに活動することで、自らすすんで地域社会に関わろうとする態度を育てる。	地域をステージとした教育活動を展開するとともに地域人材を活用することによって、児童が学校・地域・日野市を知り、地域への愛着をもち、地域へ還元していけるようにする。	○研究奨励校「地域がステージの教育活動」をテーマとした教育活動を生活科・総合的な学習の時間で行い、校外学習やゲストティーチャーを積極的に活用することで「地域への思いを大切にする児童の育成」を図る。 ・＜自然環境ステージ＞近隣公園等、自然を用いた体験学習 ・＜教育機関ステージ＞幼保小交流授業、大坂上中体験授業 日野台高校クラブ協力、実践女子大学教育ボランティア ・＜官公庁等ステージ＞日野市役所、日野消防署、警察署 社会福祉協議会、地域商店等	３	４　地域人材を活用し、児童の地域社会に関わろうとする態度を育んだ教員が１００％ ３　地域人材を活用し、児童の地域社会に関わろうとする態度を育んだ教員が９０％以上 ２　地域人材を活用し、児童の地域社会に関わろうとする態度を育んだ教員が８０％以上 １　地域人材を活用し、児童の地域社会に関わろうとする態度を育んだ教員が８０％未満	３	４　「地域のことが好きになった、地域について知っていることが増えた。」児童が９０％以上 ３　「地域のことが好きになった、地域について知っていることが増えた。」児童が８０％以上 ２　「地域のことが好きになった、地域について知っていることが増えた。」児童が７０％以上 １　「地域のことが好きになった、地域について知っていることが増えた。」児童が７０％未満	・学校が軸となり、地域をつくっていくという文化をつくりたい。そのために、CS（地域）も含めて、学校との情報共有をしたい。（プラットフォーム・窓口をひとつに。） ・「情報を見にいく」「学校が情報を送る」双方のやりとりができる場が欲しい。 ・先生方は異動していくが、情報共有のしくみや学校をささえる文化は残していきたい。 ・お子さんが卒業された保護者やお子さんが学校にいない方も参加できるようなしくみ作り。 ・地域の方の人材バンクをつくり、学校の支援をしていきたい。 ・ボランティアの募集後の調整（例：体育の日の見守り時間とお子さんの演技の参観の調整）が大変。ボランティアの募集の窓口を一つにし、調整がしやすいしくみをつくっていく。	生活科・総合的な学習の時間を中心に、地域をステージとした実践を行ってきた。地域人材や近隣の商店、施設等を活用してきたことで、児童の学ぶ意欲や興味が育まれたと感じる。保護者も84.9%と肯定的な回答が高かった。今後も地域人材の活用や校外学習を通して、児童の地域に対する好意的な気持ちを育てつつ、地域のイベント等に参加する実践につなげていく。
	【多様な参画】 学校が核となって地域・企業・教育機関とつながり、それぞれが連携して学校教育を支えるスクール・コミュニティを形成する。	コミュニティ・スクール元年として学校運営協議会の組織づくりを行うとともに、地域学校協働活動を充実させ、地域・企業・教育機関と連携した教育活動をさらに推進していく。	○年８回の学校運営協議会の内４回は学校公開日に行うことで教育活動を見る機会を設けるとともに、給食試食懇談会や教員との懇談会を設けることで、学校教育の見える化を図る。 ○PTAや地域コーディネーターを通して学校行事へのボランティアを募り、保護者・地域の学校参画の機会を設ける。 ○地域学校協働活動として読み聞かせ・花壇整備以外に取り組めることを検討していく。 ○地域行事等の情報を学校からも積極的に発信し、児童・保護者が地域へかかわる機会を推進する。	２	４　「地域とともにある学校」を意識し、保護者・地域とのつながりを深めた教員が１００％ ３　「地域とともにある学校」を意識し、保護者・地域とのつながりを深めた教員が９０％以上 ２　「地域とともにある学校」を意識し、保護者・地域とのつながりを深めた教員が８０％以上 １　「地域とともにある学校」を意識し、保護者・地域とのつながりを深めた教員が８０％未満	２	４　「学校は、保護者・地域の力を生かした教育活動を行っている。」保護者の肯定的回答９５％以上 ３　「学校は、保護者・地域の力を生かした教育活動を行っている。」保護者の肯定的回答９０％以上 ２　「学校は、保護者・地域の力を生かした教育活動を行っている。」保護者の肯定的回答８５％以上 １　「学校は、保護者・地域の力を生かした教育活動を行っている。」保護者の肯定的回答８５％未満	・学校評価アンケートは、母数によって、妥当性が変わってくる。また、回答者は概ね肯定的な傾向なので、未回答者はどう思っているのか。 ・学校公開により、その実態について保護者と共有できたのではないか。CSの周知が目的ではなく、地域と学校が協力しているということを具体的に広く知ってもらうという第一ステップが達成できたのではないか。	この評価に対応する二つの質問のうち、「児童に地域行事に参加を促した」に対して、できなかったと回答する教員が多かった。協力いただいた地域人材や施設等にイベント等を聞いたり、CS委員会の際に地域の行事等についてまとめて、参加しやすい行事を児童に紹介していく。

※評価指標・評価基準は、２の段階を現状としています。